

予算額

2,347,530 円

地域課題解決に向けた取組

取組の名称	多世代スポーツ交流事業				
趣旨・目的	<p>特許技術を利用したIT技術を活用し、幼児から大人まで多世代が楽しめるスポーツ競技会を開催し、健康増進、体力向上のきっかけ作りと子どもの総合的な教育を行う。現代の子どもたちの問題として、外遊びの減少、子ども同士による多世代との交流不足(お兄ちゃんお姉ちゃん的リーダー育成環境の不足)。そして家庭内で行うべき「マナーやルール」のしつけの不足など、過去には、家庭内、学校、そして地域社会がその役割を担っていた、子どもの「人間力」の育成が、将来の日本社会を支える上で急務であり、その一端を本事業で積極的にアプローチすべく、スポーツを入り口とした取り組みから、多世代交流イベントを定期的に開催した。</p>				
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・特許技術と電子機器を活用したスポーツ競技会 ・多世代参加型のフットサル交流ゲーム ・ピンポン交流ゲーム ・その他ボールゲーム など 				
対象者	幼児から高齢者まで	参加人数	延べ800人	実施回数	15回
効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 電子機器を活用した独自のスポーツ競技会を無料で開催することにより、当法人所属の子どもたちだけではなく、コーディネーター派遣先の小学校や、地域の子どもたちが気軽にスポーツを楽しめる環境を提供した。 ・ 参加者の親御さんも安心できるよう、本事業の趣旨に賛同いただいた北海道教育委員会、札幌市教育委員会、財団法人北海道サッカー協会からも、後援に入っていた。 				
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初めて参加する地域の子も達に対し、慣れている子どもたちが積極的に手助けするなど、異年齢の交流が見てとれた。 ・ 参加した子ども達から、スポーツで汗を流す楽しさの意見を多く聞くことができ、スポーツに関わるきっかけ作りに貢献できた。 				
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ より多くの参加者が気軽に集まれるよう、事前告知の方法に改善の余地がある。 ・ イベント開始時刻を早めるなど、小さな子どもが気軽に参加できるようにしたい。 				

小学校体育活動支援

派遣先学校総数	2 校
---------	-----

コーディネーター総数	7 名
------------	-----

◆効果をもとめるための工夫や取組など

- ・ 体育授業の内容について、まずは十分に学校側と話し合い、良好な連携を図ることを校長、教頭、学年担当、担任とスケジュール管理を含め入念に行った。
- ・ クラス中での担任(副担任含む)と子どもたちとの信頼関係を崩さず、如何にコーディネーターがスムーズに溶け込んでいくかを課題とし、取り組んだ。これは、教室内での担任と子どもたちの信頼関係というデリケートで、且つ最も重要な部分でもあるので、コーディネーターが、担任の先生よりも全面に信頼を得るという手法ではなく、あくまでも授業のサポート役で携わっているという形(関係性)を目指した。
これはコーディネーターが専門的知識や経験を持っているがゆえに、子どもたちからの視点で、先生とコーディネーターとの差がついてしまい、体育の授業が充実した代わりに、日頃接する先生と子どもたちの信頼関係に何らかの悪影響が出てしまつては、本末転倒であるとの懸念があった。
そこで当法人では、努めて先生のサポート役であるという立場を明確にし、子どもたちも派遣コーディネーターを同格の「先生」とは、呼ばせずにあくまで体育の「コーチ」という立場で、日頃の指導にあつた。
当初より、この立場を明確にすることで、子どもたちとの信頼関係だけではなく、コーディネーターと担任の先生との信頼関係と連携が早い段階で構築できたことは何よりの効果でもあり、その明確な関係性が子どもたちの視点からも見えたからこそ、良好な関係性が築けたのではないかと、この効果を分析している。

◆成果と課題

〔成果〕

- ・ コーディネーターを適宜配置することで、管理する子どもの人数が適性人数となり、安全性が高まつた。
- ・ コーディネーターを適宜配置することで、少人数制で専門性の高いグループ指導が可能となつた。
- ・ 体育の授業で見本を見せるのは得意ではない担任(女性や高齢の先生)の負担が減つた。
- ・ コーディネーターが子どもたち全般を管理する時間を作ることによって、担任が評価(テスト)に集中することができた。
- ・ 校長先生によると専門性の高いコーディネーター指導が子どもだけではなく、先生への良い刺激になつた。
- ・ 校長先生から、本事業について他校への紹介があり、次年度以降広まる可能性が高まつた。
- ・ 特別支援学級の子も達は、スキー授業などでは、特に準備に時間がかかつていたが、コーディネーターを配置することで改善され、授業の時間が適正化された。

〔課題〕

- ・ 他校とのスケジュール調整に改善の余地がある。
- ・ 小学校側から高い評価を得れば得るほど、担当コマ数の増加が希望されるが、最小人数で最大効果が生まれるスケジュールとシフト調整に改善の余地がある。
- ・ 体育過程のカリキュラム上、多人数での体育授業(最大4クラス)が多かつたため、サッカーボールなど学校の用具とクラブの用具を持ち寄つて行つたが、より効果をもとめるためには、更に貸出しの用具が必要と感じた。

本事業全体の成果と課題

〔成果〕

- ・ 学校側からの協力だけでなく、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、また財団法人北海道サッカー協会からも協力を得ることができ、信頼性が高まった。
- ・ 子ども達が、今までに体験したことのないスポーツとの関わり方から、高い関心を示してくれた。
- ・ 本事業がスポーツ情報誌に取りあげられるなど、高い関心が寄せられ、次年度以降も期待される事業となった。
- ・ コーディネーター派遣先の小学校より、高い評価を得ることができた。また、派遣先小学校長から、校長会において事業評価の報告書が発表されるなど、その効果も大いに注目された。

〔課題〕

- ・ 小学校へのコーディネーター派遣事業から、地域課題の克服事業への参加人数に大きくは繋がらなかった。
- ・ 多世代スポーツ交流事業では、イベント会場の「コミュニティドーム つどーむ」の予約可能時間帯が夕方からとなり、親御さんからも時間帯の改善が求められた。